

る。大局的には分化・深化とは全く逆のセンスである。これまでは、確かに単純・理想を日ざして、せまく鋭く物事を解析するのが第一義にあげられてきた。複雑・混沌は未分化・原始の範疇にあり、場合によっては悪でさえあった。わが国で自然史の学がいつに成立し得ないでいるのは、この思考構造のせいであろう。

広義の地学、つまり天文学、地質学(地質科学)、地理学を包括した分野がどうあるべきかの検討は、高校・大学のカリキュラム、専門研究分野の現在の在り方のかんに関わらず、非常に大切であろう。とりわけ、これらの分野のひろがりともまとまりが果たして一つの学問体系をなすかどうかという点については不可避である。地質科学と地理学とは共に地球事象を対象にした自然史系学であるから共通点が多い。地球学としてでもくくすることは十分できよう。いっぽう、天文学と地質科学は、地球を惑星としてみる最近の視点からすれば、生命の発生が宇宙空間で普遍的であるという命題を含めて非常に密接であるといつてよい。まして、銀河系と太陽系の回転の相対関係や隕石衝突と生物の大量一斉絶滅などの符合がもっと詳しく吟味される局面を考えると、やはり両者は不可分の関係にあるとみてよい。

ディテールに立入ることはできないが、三つの分野の共通項は、一つは複雑機能体を対象にすることであり、第二に時間経過に伴う諸種の変化を重要視することである。不可逆の実時間を軸にした歴史科学であるといえることもできる。開放系であるための非線形性、非平衡性が著しいことを特徴にあげてもよい。それだけに、こうした総合性、全体性の卓越する事象の取扱いには、ある意味で理想化・単純化の発想に立つ数学・物理学・化学・生物学のディシプリンを、個別に単純に適用する

アプローチには危険性がつきまとうことになる。地学という分野は、本質的にマクロスコピックな視点を欠くことができないのであり、学問の分化・深化の傾向はしたがって、地学をそのものの存在を否定するセンスをもつことになってしまったといえる。

ここで、もう一度ふり返ってみたいのである。地学が、地球という対象故に成り立つのであれば、そのアプローチにどのような自然科学のディシプリンを使おうと、いかにミクロスコピックに眺めようと、地球システムの中の事象を扱っているという認識上のフィードバックがかかってしかるべきであろう。あるいはもっと正確には、総合性・歴史性という点を主眼にした、したがってありのままの複合体をこわさない“解析”のしかたを適用すべきものなのである。ところが、複雑機能体を扱う総合科学には理念はあっても手法が確立されていないといわれる。

しかしながら、それは multidisciplinary ないしは interdisciplinary な発想どまりの思考だからであって、transdisciplinary ないし supradisciplinary な立場を容認すれば、局面は大いに違ってくる筈である。もちろん従来の個別に詳しい手法も尊重し併用しなければならない。総合を本当に求めるためには、いまのところシステム科学の発想が最も妥当にみえるが、地球システムには多様な階層性と長大な時間経過を含んでいるので、工学システムや抽象システムのアプローチでなく、自然システムとしてブラックボックスをにらみながらの研究が中心となろう。旧来の専門分野の成果をふまえ、システム科学の手法をアプライすることこそ、地学を基礎科学分野の集合とみない正しい扱いでないかと思う。

(東京大学)

テレビのルポ番組に思う

宮口 侗 逸

最近、テレビ番組の中にルポルターージュ風のものが増える時間がかかなり増えてきた。それも、テレビ局所属の記者やカメラマンによるものが多くを占めてきた。世の中が画一化していけばいくほど、多数者の日常生活に比して何らかのユニークさをもつ存在を伝えることは、人間の持つさまざまな可能性を示してくれる点で大きな意味がある。しかしその伝え方には考えさせられることが多い。

取材の対象になる場所は、都市の平均値的な生活者に

とって、そこに到達するのに何らかの困難を伴うか、そこに滞在するのに多少の不便をするというような場所が多い。絶海の孤島とか、丈余の雪に埋もれている山間とか、零下30度に達する場所というようにである。そして、そういう場所においてしっかりと仕事をし生活している人たちの持つユニークさを伝えるのが、ルポの目的であるのは当然である。

ところが近ごろの放送では、まずそこへ取材に行った記者とカメラマンの名前と顔がまずあらわれ、前おきと

して、いかに苦勞をしたかが語られる。「このきびしい寒さの中、〇〇カメラマンが頑張って撮影してきました」とか、「時化で10日間もこの島にとじこめられました」という調子である。エベレストへでも行ってきたならともかく、この程度のことは、自慢にも手柄にもなることではない。その作品によってその土地の何を伝え得たかが問題なのであって、その土地に辿りついたことでも頑張ったと賞められたのでは、果たして対象にどれだけ頑張ったと誇りつけたかを疑いたくなる。寒かろうと時化になろうと、それはその土地の人たちが、日常の中でいくらかでも直面するレベルの問題である。金と装備と組織のうしろだてのもとに仕事をしている人間のいうこととしてはあまりにも子供っぽいというべきであろう。この程度の苦勞話は、せいぜい同僚と一杯やりながらかわすのがいいところではないだろう。

もちろん、伝えたい対象をより鮮明に位置づけるために、介在者がそこでどのような状況におかれたかを材料として利用する手法はあるであろう。これは、その苦勞を前面に出すことによって作品の出来具合を割り引いてもらおうというものではないはずだし、またこれが安易

に用いられると、その作品が、果たして対象を語っているのか、作者を語っているのか、本末転倒になるおそれがある。

日本人の外国旅行記には、むしろ語り手としての自分を前面に出したものが多い。そしてそれが結構共感を呼んでいるようである。よく読んでみると、その土地を語っているようで、実はその土地における自分を語っているのである。私小説がひとつのジャンルをなす日本文化のあらわれが、ここにもある。他への関心よりも、自分への関心がどうしても優先するのである。

私はかつて、「地理学は他人に対する関心から育ってきたが、日本にはそのような関心がやすい」という意味のことを教わったことがある。私たちがどこかの土地について語るとき、その土地における自分を語ることを超えて、その土地の何を語り得たかということ、いつも反省する必要がある。その土地に存在する事物は、その土地におけるさまざまな事物とかわりを持って共存しているのであり、そのものが単独で語り手とかわっているのではないからである。

(早稲田大学)

郷土の森

宮脇昭

生態学的、生物地理学的な研究対象として、裸の大地を被っている緑の植衣、植生を扱う場合、最も身近かにあり、調査が容易なのは雑草群落である。雑草は日本の知地雑草 302種類、水田雑草92種類、また路傍や都会の空地の雑草群落を見てもそのほとんどは外国から入ってきたNeophytenネオフィイテンといわれる帰化植物である。したがって、我々が海外調査にヨーロッパ、南北アメリカあるいは東南アジアなどに出かけて調べると、その土地本来の自然林はまったく日本の植生とは異なっている。しかし、きびしい人間の影響下にある、絶えず人に踏まれる路上の敷石の間のギンゴケツメクサ群落、また繰り返して除草されている畑のハコベ、メヒシバ、イソビエなどの好窒素性の一年生雑草群落、路上のオオバコ、カゼクサ、ニワホコリなどの踏跡群落みんあつは、北半球どこへ行っても全く同じである。我々が海外で疲れたとき、あるいは全く日本の景観、ふるさとの緑とは異なった所で足もとに眼をやると、そこには日本の各地で生まれ育った頃からいつも身近かに生育していたオオバコ、スズメノカタビラ、オオアレチノギク、ヒメムカシヨモギひめんつ、また蔽密には種

類が違うがヨモギなどは北半球さらには南半球の大部分の文化景観域で見られる。

したがって、我々は、取っても、取っても生える畑の雑草、“ふまれてもしのべ道の草”といわれるグラウンドや路上のオオバコ、オヒシバ、スズメノカタビラなどは最も強い植物の代表のようにいわれている。しかし、地球上の生物社会では最も強そうに見える植物は、実はほんのわずかに環境のバランスがくずれたときに、すぐに駄目になる弱い面をもっている。ふまれてもしのべ道の草のオオバコ群落は実は踏まれるから生育できる。土がかたくなっている一面的で極端な、きびしい条件下では、その土地本来の自然植生、例えば日本列島の照葉樹林の海岸部のタブノキやツインノキ、内陸のシラカシ、イチイガシ、アラカンのような照葉樹林は芽生えることも出来ない。

反面、オオバコ群落はもし、人間が踏むのをやめたとたんにおオオバコより、踏まれるよりよい条件で競争力の強い路傍のヨモギ、オオアレチノギク、ヒメムカシヨモギそして、2~3年たてばススキ、チガヤ、クズに、